

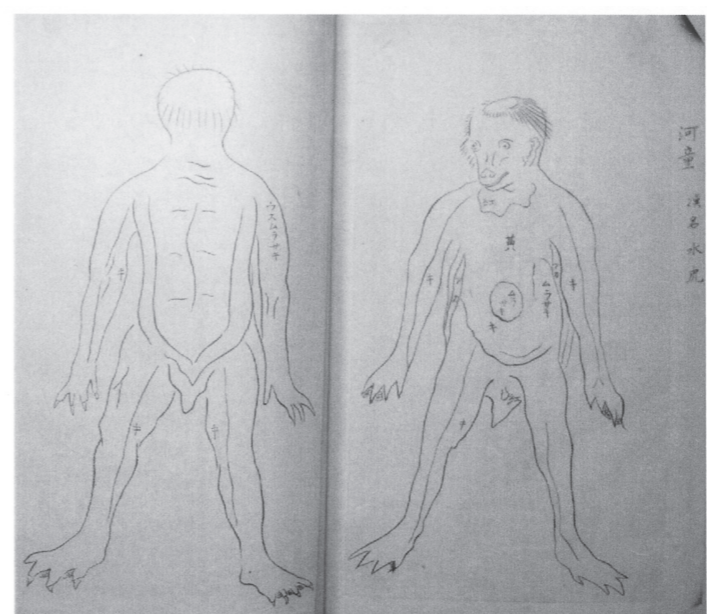
シーボルトと殿様く出島でくり広げられた「河童」問答く

織田 毅

文政十一年（一八二八）三月五日のことです。その日、出島は朝から大騒ぎでした。というのも、福岡藩主・黒田斉清公（一七九五～一八五一）が世子（あとつぎ、黒田長溥のこと）を伴って、長崎・出島のオランダ商館を訪問することとなっていたからです。

この日、黒田斉清は出島の門から入り、まず商館長部屋を訪ね（当時の商館長はメイラン）、牛小屋や花畑に寄った後、シーボルトのもとを訪れています。シーボルトの収集品を見てシーボルトに学問上の質問をするのが目的だったようです。シーボルトと共に半日程時間を過ごした黒田斉清は、その日の夕方ごろ出島を出て、当時長崎の浦五島町にあった

福岡藩の長崎屋敷に帰っています。



「河童図」（シーボルト記念館所蔵『下問雑載』より）

福岡藩の長崎屋敷に帰っています。この日、シーボルトと黒田斉清との間に交わされた問答は、『下問雑載（かもんざつさい）』という本にまとめられて残されています。編者は福岡藩士で蘭学者の安倍龍平。安倍は、蘭学に興味をもち当代一流の博物学者であった黒田斉清の蘭学顧問をつとめていました。シーボルト

との会見のときにも、黒田斉清に随行して問答の内容を詳細に書き留めており、シーボルトを「才学尋常の蘭人にあらず」と高く評価しています。『下問雑載』には、全部で三十五にもものぼる問答が収められています。一つを除き、いずれも黒田斉清の質問（下問）にシーボルトが回答したもので、その内容は、植物・世界地理・人種・気候風土・鳥・怪奇な生き物など、その範囲の広さ・知識の深さは驚くばかりです。その中から、「河童」についての問答をご紹介します（なお、原文を現代語訳しています）。

■（黒田斉清）

「わが国の言葉で、水虎、一名カワタロウ（川太郎）、又、カワゴゾ（川小僧）というものがある。夏の日に水中にあって人を害する。その形を見ることは稀な怪獣である。その種類は数品あるという。今その三品の写生図を示す。このものは、よく人を惑わす。非常に怪異である。第一の図は、西洋より乾物にして輸入される「トロンベイタ」ではないのか。「トロンベイタ」とはいかなるものか」

（※トロンベイタは、原注に「華夷通商考に見ゆ」とあり、『増補華夷通商考』（西川如見著、宝永五年刊）の巻四「阿蘭陀」の土産の項に「トロンベイタ 河太郎の事也 其骨葉に用」と記述されています）。

■（シーボルト）

「私はまだ「トロンベイタ」というものを知りません。三図を拝覧しますと、第二図は猿の類に間違いないと思います。その他一図、その背に甲羅を負ったものは、決して「ソークジール」（原注「吸乳獣」）ではなく、もしこの獣がいれば、亀のような「テウエイストラクチク」（原注「水陸とも棲居するもの」）でしょう。しかし、この獣がいるとは考えられません。閣下がもしその乾物をお持ちであれば、どうぞ一覽させていただきます。

きたい。私の力を尽くして調査して、それが何者かを世に公にすれば、私の名譽もこれに過ぎるものはありません」

■（黒田斉清）

「水虎は、三図とも薩摩の老公（島津重豪）がその物を得て写生したものである。もとより疑うべきものではない。わが国の貝原益軒が著す『大和本草』に言う、「六を蔵すること亀に異なることなし」と。思うに、この甲羅がある物を言うのか。その乾物は、中津の家臣・神谷源内が老公より得たもので、これを借りて示したいのだが、源内は江戸にいて距離も離れていることから、オランダ船が出船するまでに取り寄せることは困難である。残念なことだ。

また、本藩（福岡藩）の人々の間にも水虎を目撃するものが多いと言う。その存在を疑うべきではない」

■（シーボルト）

「水虎は、私もまだその何者であるのかを知りません。この獣がもし存在すれば、必ず亀の一種に間違いないと考えます」

当時、河童の存在はかなり信じられていたとみえ、一般の人々はもちろん、蘭学に通じた黒田斉清や島津重豪までもが存在に疑いを持たなかったようです。現代の人々からすればおかしな話でしょうが、まだ自然が豊かであった江戸時代には、さまざまな奇怪な事件がおこっていたことが記録に留められています。今でも全国各地に多くの河童伝説が残されています。

この時の問答は、互いに実り多いものであったようです。のちに黒田斉清はシーボルトの影響を受けて『脚氣予防説』を著し、また動植物の標本や著書をシーボルトに贈っています。これらは、シーボルトの日本研究の際の貴重な資料となりました。

シーボルトの日本研究は、多くの日本人の協力に支えられていたことが、近年の研究から明らかになっています。「蘭学大名」と呼ばれる黒田斉清も、その一人であったといえるでしょう。

（シーボルト記念館係長）

■風信

○先月末、中国・ミャンマーの被害の報告に接し、「我等みな出来る限り無駄を省き。出来る限り救援の事に心して下さいとの事。」協力いたしました。

○五月はNHK長崎文化センターと共に催し波佐見町の文化財史跡を訪ねた。講師には波佐見史跡研究の第一人者「瀬信雄氏」が来て下さった。一同先ず国指定史跡永尾窯跡より七ツの国指定波佐見古窯群を見学、金屋神社、三領石、旧波佐見宿（国文化財・六十余州酒蔵等）、東前寺では御任職御夫妻に御接待をうけ大日如来・中世五輪塔群を見学。やきもの公園では世界の各種焼き物窯を見学。永彩器では階上の特別展示室を見学、新茶の贈物を戴く。次の安楽寺でも御祖母様はじめ御任職御夫妻に迎えられ秘佛拝見後、各自に波佐見焼のお土産まで頂戴した。次は急いで野々川キリシタン墓碑群見学に行く。同地でも町文化協会長野澤義典氏が待つておられて説明案内して下さった。そして最後の「陶芸館」に着いた時には閉館十五分前であったが、（株）くらわんか館の福田昌祐先生が出てこられて時間を延長し、階上資料室まで案内して下さった。「今日は波佐見の方々の心ゆたかな御もて成しを戴き、久しぶりに心のなごむ一日でしたね」と、参加者一同、口を揃えて言われていた。

○六月一日、この日は昔より長崎の人にとっては「ながさきクンチ」の第一歩「小屋入り」の日である。旧記によると「神棚に脛なますを供え 家内一同水餅を戴く」とある。「水餅とは正月のかき餅を貯えおくもの也」という。

○又、古記によるとこの日、本年の踊町は、月の初旬のうち良ろしき日に町内こぞつて奉納踊を稽古する踊小屋を用意し、次いで町内乙名おとこな（町代表役員）を先頭にシャギリ囃子に乗って諏訪社に「本年当番の踊町を無事終了するようにと祈願し、町内に帰って祝宴をはる」と記してある。現在では「六月初旬のよろしき日」ではなく、各町六月一日を小屋入りの日と定め諏訪社に行き、其の後は伊勢・八坂の各社と当年の年番町を中心に踊町の人達はシャギリ囃子と共に挨拶に廻っている。この日より夏の衣装を着ることも記してある。

○長崎文献社より「卓袱料理のすすめ」を戴く。（古場久代先生著、ブライアン先生英訳）内容は第一章の卓袱料理を生んだ長崎の歴史と文化より始まり、旧料亭のシッポク料理、今日のシッポク料理と新しい目で長崎伝統の料理が解説されている。（三、二五〇円）

○長崎県美術館に七月十三日まで開催されている、「イギリスより里帰りの浮世絵名品展」実に楽しかった。

